

禅の心を米国へ

—— 山口晴通老師らがロスを訪問 ——

横浜善光寺育英僧 遠藤博因

文化のモザイクに根付くZEN

ニューヨークに次ぐアメリカ第二の都市、ロサンゼルスには百以上の人種、言語、文化がモザイク模様のように広がっている。日米文化会館の広場いっばいに広がる盆踊りの練習風景には、日系人だけでなく、白人、ヒスパニック系の人々も結構楽しく輪の中で興じているのが目にとまる。日本とはひと味違った盆踊りの光景は、ロサンゼルスの象徴的なモザイク現象の一端まである。

住宅街の中に禅センターと書かれた看板を見ることが出来る。アメリカ社会に禅を伝えた先達者、鈴木大拙博士、千崎如玄老師をはじめ多数の指導者の遺徳によって、今日特に白人社会に“ZEN”という三文字で広く敷衍された禅仏教。これらはロサンゼルスの文化に厚みをもたらずモザイク構造の一面である。

ロサンゼルスという街は、異質なものの共存共栄を包容し、新たなものを生み出してゆく可能性に満ちた都市であり、そんなエネルギーを感じさせる街でもあるのだ。

このほど曹洞宗の山口晴通老師（神奈川県成願寺住職、駒澤大学講師）は、黒田武志老師（横浜善光寺住職）の案内で、そのようなダイナミズムにあふれるロサンゼルスのリトル東京にある禅宗寺（曹洞宗の北米開教総監部が置かれている）、そしてロサンゼルス郊外の山の中腹に二十万坪の敷地を有する禅苑、禅マウンテンセンター陽光寺で「禅と詩」と題して講演された。ご子息、勝隆君も随行し、講演とともにロサンゼルス禅センター佛心寺、新設の禅センター孤雲寺等を歴訪された。

七月二十二日、一行はロサンゼルス国際空港に到着。その足でダウンタウンに隣接する禅宗寺へ拝登。法堂で三拝の後、隣接の建物に事務所を構える曹洞宗海外開教センターを訪れ、所長の奥村正博開教師、横山泰賢開教師の歓迎を受ける。同センターは一昨年、禅宗寺の北米開教七十五周年を機に設立され、北米における宗

務庁の出先機関として全米の曹洞宗寺院、禅センター間の連絡業務と活動援助を行なっている。

所長の奥村老師は自ら各地の禅センターで行なわれる摂心会へ出向き、月の半分以上を全米各地の禅センターで提唱されるという忙しさである。

さらに一行は黒田老師の実兄である故前角博雄老師の開創されたロサンゼルス禅センター佛真寺を訪問した。住宅街の半ブロックの敷地を有するこの禅センターでは、四十人あまりの人々が隣接のアパートに住み、朝晩の坐禅に参ずるといふ、目的をともにしたサンガ（僧伽）を形成している。その後、このセンターからさほど遠くない住宅街の中に開かれた禅センター孤雲寺を訪れる。

約一年前、前角老師の法嗣の一人、ウィリアム如元師の発願により開創された禅堂は、八月

末に開単式を迎える。如元師並びに白人の弟子がきれいに頭を剃り上げ、作務衣、絡子姿で出迎えてくれた。ここでは八十年ほどたつ大型の民家を購入し、完全に修繕工事を行ない、屋根裏部屋を禅堂風に改築、白壁に化粧柱を施し、正面にニスの光沢美しい祭壇が設置された空間は、坐禅堂特有の緊張した空気を感じさせた。

二十四日はダウンタウンを出発。砂肌の大地を東へ向けて走ること一時間半、さらに南はサン・ハッシントン連峰へと連なる山道を小一時間走り、アイデルワイルドという小さな村へ辿り着く。翌朝、この村から二十分程山へ入り、講演会場の禅マウンテンセンターへ向かう。

一行は御開山である故志保見道雲老師（神戸・八王寺）及び開山故前角老師の墓前で詣塔諷経を勤めた。その後、仏殿、開山堂で一坐の諷経。白人の参籠者が如法に読経し、鐘や木魚を撞く光景には全く違和感がない。現在、この

禅センターは前角老師の法嗣、イギリス出身のチャールズ天心師と妻のアネ清泉尼によって運営されている。今春、夫婦そろっての晋山式を行なったことでも知られる。

ここでの参禅修行は禅門の規矩に従い、夜明けとともに起床し坐禅、読経を勤め、日中は作務をし、薬石（夕食）の後また坐禅を組むという一日である。

山口老師「禅と詩」について講演

午前十時から殿鐘の音とともに黒田老師の導師による諷経が坐禅堂で一坐厳修される。木魚の歯切れのよいリズムに合わせて、英訳による『参同契』が読経される。この後、黒田老師が今回の講演の機縁について話され、山口老師はアメリカで禅を修行する人々の前で話すご縁をいただいたことに感謝する主旨を述べ、「禅と詩」について講演された。

まず山口老師は、詩そのものについて、洋の東西を問わず、国家や民族を超越して、それぞれの言語生活の発達につれて自然発生的に成立する。そして詩は時に自然界を恐れる祈りであり、愛を告白する心の叫びでもあり、深く我々の感情表現や実生活に根ざしていることを論じた。

さらに漢詩と禪の結びつきについて、神秀と六祖慧能の偈を引用され、同じ修行の境地を詩によって表現したけれども、六祖慧能のほうが禪的立場から物事を直感的に把握していることを説明された。最後に、学生時代に鈴木大拙博士の講演で聞いた「いまの若者には詩がない」という言葉がいまだに心に残っていることを語られ「人間の向上に詩とロマンの心は不可欠である」という言葉をもって講演を締めくくられた。

質疑応答では、詩というものは習うものか、

それとも坐禅をしていて、時がくれば浮かんでくるものか、詩が参禅修行の場において古くから使われていることを再認識した、また寒山拾得について説明を請われるなど、聴講者の意識の高さが伺われた。

二十六日から山口老師は禅宗寺本堂で、日系人の方々を対象に講演された。曹洞宗の北米開教の歴史は、先の大戦以前にさかのぼる。移民第一世の方々が幾多の苦難の中、心の拠り所として守り抜いてきた寺院である。現在も二世、三世そして新一世と呼ばれる方々を中心に、日系人の信仰の場として、葬儀、年回法要はもとより、お盆祭り、坐禅会、文化教室等のコミュニケーション活動が盛んに行われている。

放浪禅を説く

漢詩の手ほどきも

黒田老師は三十三年前、当時開教師だった実

兄前角老師を頼って渡米し、禅宗寺の坐禅会の指導に当たった思い出などを語られた。山口老師は、ここでは自身の体験を通して、詩に親しむ人々との交わりの中で感じ取った喜び、そして自作の漢詩を例にとり、詠むだけでなく作る楽しさの実践的な手ほどきをされた。

また中国禅宗の五祖弘忍が六祖慧能に印可証明を与え、両者とも密かに山を下りた逸話の中で、自身が実際にかの地・黄梅山を訪ねた時の境地を詠み、禅門においては各自の到達した悟りの心情を究極の詩によって表現してきたことを説かれた。

聴講者の質問にも丁寧な答えながら講演は進められた。詩吟を学んでいる方々からは、専門的な韻や平仄についての質問がなされ、時代を反映してか、コンピューターを用いた漢詩作成の可能性について質問が飛び出したりした。山口老師は、そのようなことも可能であるが、詰

まるところ心が入っていないものになってしまふと断言された。

最後に、新年の所感を詠んだ次のような自作の詩を紹介し、自らの禅の家風を「放浪禅」と定義され、歴代の祖師方の行履を学ぶためには、東西南北いずれの地にも縁のあるところへ出かけるでしょうという言葉で講演を締めくくられた。

今朝観妙接新年

一錫遊空慕昔賢

南北東西三隻菴

修來證去放浪禪

（今朝妙を觀じて新年に接す／一錫空に遊んで昔賢を慕う／南北東西三隻の菴／修し來たり證し去る放浪禪）